

「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから20年⑥

今回の連載は前回の連載⑤の翌年のことである。2008年8月16日から24日までの第11回環境学習キャンプで、日本からは6人の参加者であった。パンダキャンプでシリボンさんと環境学習を始めた初期のころで私たちのワークショップが方向性を示し始めた大事な年になった。(中込 卓男)

タイの鳥 3 日記より

若林 卓司

2008年 8月17日

プラナコーンで10時に会う約束である。少し前に行き、ポンティップと学食で朝食。今回日本側は六名である。ゴミさん(中込 貴芳)、ゴメさん(中込 卓男)、それに高校の生物の先生の永井さん、学芸大4回生の秋山君、それと小菅村の村会議員の木下さんとその住人でゴメさんの会の会員の黒澤さん(※黒澤事務局長の奥さん、黒澤東江さん)である。プラナコーンのチンタナー先生、チンナタット先生に送られて、まずはバンサイの手工芸センターを目指す。バンはシリボンさんが仕立ててくれたもので、奥さんのポータンさんと二人の子供、ラームさんが迎えに来てくれた。ここで買い物をしたり、手作り教室に参加して、修了証をもらったり、鳥のケージに入ったりして、パンダキャンプに着いたのは暗くなっていた。



パンダキャンプは一部を拡張して、大きな宿泊所がつくられていた。いつものように呑み助の日本側はシリボンさんと冷えてもいないのに缶ビールを開けていた。夜、雨が降った。

8月18日

朝、シリボンさんにパンダキャンプに植えられている草木の説明をしてもらう。今回はまず、フーワイカーケーンからである。最初にサイバー滝に行く。ここでフーンさんに会う。フーンさんはフーワイ・メーディーで上役と対立したらしく、職場をかえなければならなかったらしい。その案内で滝へ。途中でいろいろなものに出合ったが、みんなを喜ばせたのはサソリだった。黒い大型のサソリだった。



滝は大きなものではなかったが、水量が豊かだった。フーンさんが宿泊所の近くにヤイロチョウの巣があると教えてくれた。それで期待したが、巣穴はもぬけの殻だった。今朝まで幼鳥がいたというのが

残念だった。私は未練気に巣立ちをした、その巣穴の写真を撮った。

昼食はシリポンさんからスープ財団の人とすると聞いていた。ダム近くの二つレストランがあって、そのうちの一つはフーワイカーケーで狩った動物の肉を食事に出すところだそうだ。本来はその店へのあてつけのために、食事する意図があったらしいが、私たちが約束の時間にすいぶん遅れていったとき、その店で待ってたスープ財団のソンバットさんと奥さんのベンジャマースさんを私たちは店の主人と勘違いをし、会食の趣旨をきちんと把握できなかったのが心残りだった。



ソンバットさんはスープ財団の活動の現状を話してくれ、ギターの伴奏で、「森の叫び」という歌を聞かせてくれた。食事中に激しい雨が降った。

フーワイカーケーの宿泊所に着いたのは夕方になっていた。ここは2回目になる。男組はスープ・ナカサティアンの像があるほうへぶらぶらし、観察塔に上って鳥を見た。カップルと思えるカササギサイチョウの飛翔を見た。夜は野生動物の観察をした。宿泊所の前は草地のテント場になっているが、シカがよく現れるという。2年前にはヒョウやトラも来るとフーンさんに聞いたので、夜中に起きだして、周りを見に行ったこともあったが、今回は近くの川岸に行った。向こう岸でライトの中にサンバーディアーやホエジカの姿があった。

8月19日

食事は管理事務所の方に1キロほど歩かなければならないが、宿泊所の近くの川と管理事務所に行くとき通る橋は同じ川なのだから距離にして知れていると思っていた。みんなそう思っていたに違いない。川を渡って探鳥しながら行くのもいいだろうと思った。シリポンさん、黒澤さん、木下さんは来なかったが、6人で川を下っていく。ところがいつまでもたっても橋に着かないのだ。言い出しっぺの私

に非難が集まってくるし、また先の景観からも橋があるところの様子にも見えない。幸い携帯が通じたのでポンティップに連絡を取ってもらおう。川はかなり蛇行をしているらしい。

先は長いなあと思って水の中を歩いていると、突然繁みの向こうからフーンさんの声が聞こえてきた。この川はいびつなS字状をしている。このまま歩いているととんでもない時間がかかると、バイパス路を切り開いて、スープの自殺した官舎が見えるところまで連れ出してくれた。なぜ、私たちが川のどの辺りにいるかを想像して、フーンさんがやってこれたのか、ゴメさんはその勘のようなものを盛んに賞賛していた。私はフーンさんがやって来た茂みの向こうに道路があるものと思っていたのだが、そんなものはなかった。スープの官舎がある辺りから観察塔の下へと川が流れているが、その川は橋が架かっている川と別のものであろうと思っていたが、それが同じもので蛇行によって形成されたものだと言われた。



朝から思わぬ運動をしてしまったが、朝食の後、私たちはフーンさんの案内で「トラ」のトレールに入った。このトレールはその名の通り、トラやヒョウウの観察に用いられていたものだが、観察は終わったという。このトレールは以前歩いたことがあるが、フーンさんは別のところへ内緒で案内してくれた。



出発の前行くところは象の多いところで、トラも出るとフーンさんが話してくれた。そして腰に挟んでいる拳銃を見せてくれた。ゆっくり列を作って歩いていくといたるところに象が食べた跡がある。竹なんかでも引き裂かれて地面に倒れている。この辺りの竹が一箇所に密生し、棘の生えた枝が何重にも取り巻いているのはこういうことに対処するためだろうか。日本のような生え方では一本一本倒されて甚大な被害を受けることだろう。途中でサルの群れに出会った。カーンの一群だった。1時間半ぐらい歩いてあちこちに小さいぬた場が点在しているところに出た。トラの足跡もある。フーンさんの話ではこの辺りは赤っぽいウア・デーンと呼ばれる野生の牛が多いということだ。



帰りは別の道を歩いた。今は雨季なのでいろいろキノコがあったが、編み笠がかかったのや漢方薬に使うキノコなど初めて見るものもあった。小さな池に出た。前回「トラ」のトレールを登って、尾根から見下ろした池である。話を聞くとフーンさん等が乾燥期に水に困る動物のために作ったという。その灰色の水面を打ちつけるようにカンムリアマツバメが水浴びをしていた。ここから宿泊所までわずか

だった。昼食の後、「カオヒンデーン」トレールの方へ歩いて行った。たくさんの足跡とともに、ここでサソリモドキを見た。



雲行きが悪くなってきたのでトレールには入らずに引き返す。宿泊所で少し休んでから、車でタップ・サダオ川の下流へ行った。宿泊所の近くを流れているのもこの川だし、朝彷徨したのもこの川、午前中森の中を歩いて出合ったのもこの川。今回はこの川に沿って行動したようなものだ。道は一部路肩が崩れていたりして、シリポンさんは慎重に運転していた。突然目の前で大きな鳥が飛び出した。すぐに茂みに飛び込んでしまったが、クジャクである。シリポンさんとフーンさんの話を聞いていると20年ほど前この辺りでクジャクを放してから住み着いているという。フーワイカーケーンでは絶対に行ってみたいカオバンダイ、去年行ったメーディー川流域、それにここの三か所だという。

車を降りて川に出る。砂地にクジャク、カワウソの足跡がいっぱいである。フーンさんが浅い砂地の川底を敏捷に逃げ回るものを捕まえようとしていた。何か甲羅のようなものがあるがすぐに砂地にもぐってしまう。用心しているので噛むのかもしれない。それを突然私の足元に放りつけてきた。スッポンだった。背を押さえると首を伸ばして噛みつこうとするが、先ほどの逃げ回りですっかりエネルギーを使い果たしたのかもしれない。すぐにおとなしくなってしまった。





この川にはカワニナのような貝が大変多い。水の中にホタルの幼虫がいればしめたものだと思ったが、強く雨が降り始めてきた。帰りの道が気になったのか、シリボンさんは私たちを急がせた。夕食が終わったのはもうすっかり暗くなってからだった。宿泊所に帰るのかと思ったら、シリボンさんはちょっと動物を見ようという。それで外部へ通じる道へ車を走らした。荷台に乗っている連中はライトを照らして、目が光った、あれはシカだ、と興に入っている。どのくらい走っただろうか、私は左手にはっきりこちらを向いた動物の姿が目に入った。荷台の連中はもっと鮮明に見えただろう。イヌ科であることははっきりしている。「マーナイ」か「キツネ」である。やかましく穿鑿したが一匹しかいなかったことでキツネだろうとした。

宿所に戻る前に、前日シカを見た川岸に行った。Civetの種の決着がついていなかったからだ。シカはいなかったが、幸運なことにCivetは木の上にいた。ああだこうだとみんなで見て、Common Palm Civetにおちついた。Civetはジャコウネコのことだ。宿所に戻ってシャワーを浴びて、少しすっきりした。温度は20度は切っていないだろうが涼しくていい。一部はまたビールを浴びだした。フーンさんが奥さんを連れてきて、私たちはいろいろ話した。

8月20日

シリボンさんは、18日サイバー滝に行った後、温泉に行く予定をしていた。しかし時間がなくなったのでそれを割愛した。日本側は残念だったのでそのことを話すと、朝に行くという。それで、朝6時に起きて朝食なしですぐにフーワイカーケーンを後にした。早朝の探鳥をしようと思っていたポンテップは不満だったようだが、日本人の温泉狂に勝てる訳がない。温泉はサモートンというところにあった。辺りは今ダム湖になっているが、以前は寺があったという。現に仏像があったが、その仏像は昔は見上げるような状態になっていたらしい。湯の湧き出し口も水の中になってしまうので、その部分

に管をつけて上に汲み上げているという。ようするに、湯の湧き出し口や仏像の周りを少し埋め立てて島にして、そこに温泉施設を作ったものだ。



男連中が入った建物は二つの浴槽があり、一つはかなり広かった。湯は汲み上げてタンクに入れて置くため、朝一番はあまり温度が高くない。浴槽にちょっとぬるい湯を張りながら入るので体が温まるまではいかなかったが、こんなところで入れるとは思っていなかったものでこれでもよかった。建物の周りでスズメの群れの近くにイエスズメの小群もいた。また、温泉に入らなかったポンテップはセアカスズメの写真を撮っていた。三種のスズメが同一の場所にいるのが気になった。

パンダキャンプに戻って、遅い朝食をとってから、恒例のようにイマートのカレンの集落へ行った。ここで腰を使った織り方を見学させてもらい、何人かは織物を買っていた。隣がゴムの採集をしているので、今朝取り立ての樹液を処理しているのも見せてもらった。



黒澤さん、秋山君、ゴミさんはその処理過程をやらせてもらっていた。帰りにタイ語で「オン」と呼んでいるバンブー・ラットを見せてもらった。





パンダキャンプに戻って、昼食後、ノイさんが建てている竹の家の屋根葺きなどを手伝った。ノイさんは私たちが泊まっている宿泊所を建てた人で、シリポンさんの仕事を手伝っている。カレンとラオスのハーフだという。カレンの家を訪れると竹で床が延べてある。シンプルで足ざわりもよく、日本側は日本側はこの作り方を知りたがっていたが、目の前でノイさんに作ってもらい、自分らも作ってみる機会を得た。



日本側は活動域の小菅村ロッジを作っているというが、この竹の床はそこで生かされることだろう。また、ノイさんに竹で作った鳥用の籠を見せてもらった。簡単な仕掛けなのだが見事なものだった。今は使うことはほとんどないが、ニワトリほどのものに効果があるといっていた。夕方日本側はマッサージに行ったので、私はしばらく横になった。グループでは私が一番年寄なのだ。これはあるとき私にとってびっくりするほどの事実なのだ。帰りが遅くなったので、夕食が遅くなり、その後なんやかんやしゃべって時間を過ごした。

8月21日

今までバーンライへ来てずっと遊んできたが、何のためにここに来たかと言うと、この日のためである。過去二回は環境教育というより何か科学物理教室のようなものだったが、今回はようやく、環境教育について踏み込むことができた。前座の私は鳥の

調査方法をスライドを使って話したが、ゴメさんが自分の在職する小学校での環境教育の具体を話した時は見えていた先生からため息のようなものが漏れた。その後ゴメさんが会の自然文化誌研究会での環境教育の理念と活動について話した。また、最後に木下さんが小菅村での活動について話した。午前中は地元の先生方に話したが出席された先生は25人ほどだった。



午後は学生を対象にした活動だった。人数は先生と同じほどだと聞いていたが、小学校の高学年から中学生まで、もっといたように思う。まず、永井さんが日本から顕微鏡を持ってきて、自分の口の中の細胞を見たり、いろいろ微生物の観察をした。学生のほとんどは今まで顕微鏡に触れたこともないらしいので、みんな嬉々として接眼鏡をのぞき込んでいた。私は次の用意の手伝いで忙しかかったので、この時はポンティップが通訳をした。



次にゴメさんが竹等を使った2、3の遊び道具を実際に学生に作らせた。学生の人数が多かったので、二つのグループに分け、一つのグループは外に出た。ホールでは秋山君、黒澤さんが中心に指導した。しばらくして雨が降り出し、外のグループは私たちの宿所のベランダで続けた。雨がやんでからはグループを入れ替え、この作業を続けていると予定の時間になってしまった。日本側はまだプログラムを用意していたが、今回は今まで以上に実りがあったと思

う。私はまたしても疲れたのでしばらく休んだ。

夕食を済ましたころ、ソンバットさん一行が来て、主に「カラワン」の歌を聞かせてくれた。4、5人来ていたが、ある人は音楽を使って自然保護を訴えているという。日本側も何かすることになり、ギターのうちまいゴメさんが自作の曲を歌った。私も長い間弾いていない支離滅裂のギターを弾いた。この時来ていたボンさんは近くで福岡式農業を実践しているという。それで次の日必ず訪問することを約束した。何曲も聞かせてもらったが、時間のすぎるのが早くソンバットさん等の活動について具体的に聞く時間がなかったのが惜しまれる。



8月22日

朝食後ブ・ボーン小学校へ行った。小さいながら図書館、ホールが出来ていたので驚いた。寄付を募ったという。学校の回りに植えたトウモロコシを売って、臨時の先生二人分の給料も払っているという。しかし一人4500バーツでは大変だと思う。三回目の訪問になるが学校の環境事情は少しずつだがよくなっているようだ。今回もゴメさんのクラスからの寄付金とボンティップがピケットを二缶贈った。



一度パンダキャンプに戻ってから、シリボンさん

の家に寄った。ここでマーイ・ファーンという木を煎じたお茶をご馳走になり、五角のカブトムシを見せてもらう。そしてボンさんの家を目指した。今回初めての4人はボンティップが近くのタム・カオウォン寺へ連れて行った。私等の間では一度は見ておくべきものになっている。その間に私たちは先にボンさんの家を訪れた。そこで日本軍の話聞いた。それは弟のオンさんが言い出したのだが、イマートのずっとむこうに高い山があり、そこからはフーイカーケーンが一望できるという。古老の話ではその山の頂上に日本軍の航空監視施設があったという。今残っているのは石組だけだが、オンさんは実際に行ってみてきたという。ただ、そこまでの道のりは険しく、ゾウやトラが多く、危険だということだ。そこにはザボンの木があり、それは苦くて食べられないが、それも日本軍が植えたのだろうと言っていた。そうするとシリボンさんがこの辺りには飛び火したように大型のカタツムリがいるがそれも日本軍が食料として持ち込んだものかもしれないという。なかなか興味ある話なのでシリボンさんには情報を集めてもらい、ゴメさんには日本でこの辺りに日本軍が展開していたのかどうか調べてもらうことにした。家でワーンの葉を煎じたお茶を呼ばれた。その名の通り甘い。また、たくさんザボンを出してもらった。そのうち寺組が合流した。



目ざとい連中がざるに干してあるもち米を見つけた。何をしているのか尋ねるとどぶろくを造っているという。9月1日はスー・ナカサティアンが自ら命を絶って18年目になる。その追悼式の前日の夜はコンサートがありその時飲むという。どぶろくの造り方をお母さんから教えてもらう。



パンダキャンプに戻り、昼食をとり2時過ぎになっただろうか。パンダキャンプを後にする。今回はとりわけ充実した内容のように思えた。つぎから環境教育をどのように発展させるか課題は尽きないように思えた。帰りにスンプリーの100年市場に寄り、参加者6人全員竹の床作りに使う鉋のようなものを買った。ノーイさんが使っていたものだ。



『藤農便り』 第8号

宮本茶園 tetote farm

宮本 透

藤野2回目の冬は殊の外厳しく、最低気温氷点下の日が続き自宅の水道管は破裂、部屋のファンヒーター温度表示は10℃に届きません。9時過ぎまで布団にくるまり、温くなった午後に畑に出かけ、趣味のYouTube鑑賞にたっぷり時間を使いました。一押し冬のアニメは「ガヴリールドロップアウト」、JKになった天使ガヴリールが「ネトゲ ジャージで ゴロゴロ」、悪魔サターニャたちとつるんで楽しく欲に溺れた人間界に染まっていくという物語です。ED「ハレルヤ☆エッセイム」の一節に「わたしたち 好きなことだけして 生きてくと決めたの」とあり、賃金労働者を辞めた私にぴったりの歌詞です。「劣等 Let's Try ドロップアウト」の生活を乐しみます。

・就農と就活

1月1日から職業は農業、藤野には先輩農家の宮本農園があるので宮本茶園を名乗ることにしました。「一年の計は元旦にあり」で「食品製造」の授業を担当していた時に購入した農文協「茶大百科」を読み始めました。「茶の